日本家屋には光がよく映える

国際ロータリー2660 地区ガバナー事務所職員 大西麻容 画家 小畠由佳理



梅田から、電車とバスを乗り継いで辿り着いた羽曳野市郊外。最寄のバス停を降りて近所の交番に畑田家までの道を尋ねると、なんとこの地域は畑田家だらけだとか。同じ名前の表札を数えながら畑田家を探し当てる。

玄関をくぐり、思わず小さな歓声をあげた。 そこにあるのは生まれて初めて見る竈だった。

その静かでおだやかな美しさに心を奪われ、今日は素晴らしい所に来たのだなと胸が躍った。

興味を惹かれたのは「つし(屋根裏部屋)」へ続く長い梯子だった。好奇心に 駆られて、梯子を登る。本当に屋根裏 の物置場だったのかと目を見張る立派 な梁がどっしりと構えていた。

日本家屋の窓は、西洋のものに比べる と決して大きいとは言えない。部屋の 明かりも多くはない。

一番有効な明かりは窓から差し込む太陽光だ。

生憎、この日は曇りで、室内は全体的に薄暗かった。それにも関わらず、目が



慣れてくるとそこには光の存在感があった。

窓から飛び込んでくる限られた太陽光。その光は部屋に吸い込まれるように闇と一緒になり、その残り香のようなやさしい明りが、和紙に描かれた墨汁のように 濃淡のある陰影を作る。その空間を心地よく感じる頃には、光がとても眩しく、そしてとても有難いものに感じた。

日本家屋には光がよく映える。

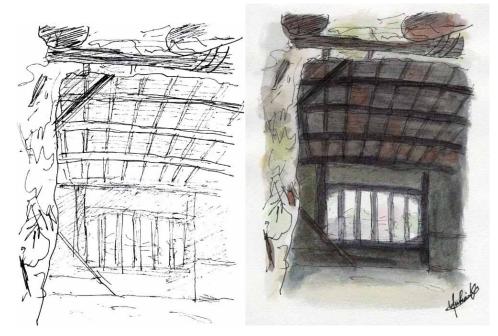
写真と文:大西麻容



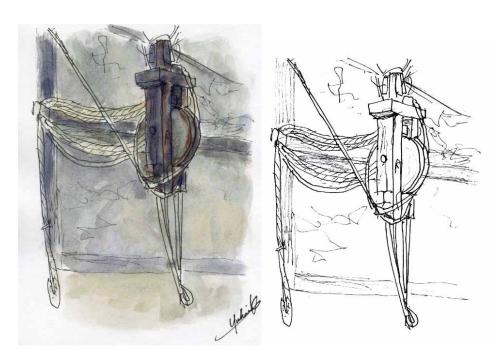
あっ! すごい! 梁が私たちを見守っているのだ。誰か出そうな雰囲気。



昔、活躍していた道具たちは、家主が帰ってくるのを待っているでしょう。



明暗のバランスがとれたモチーフを見付けて、描いてみたくなった。 いつまでも残るだろうか?



現役を終えて、やれやれと思わず、また活躍するのを待っているだろうね。

私は歴史には弱いが、畑田家に来て驚いたのは、主屋の土間の大戸、納屋の二階の屋根 裏、土間の太い梁でした。

以前、滋賀東近江市蒲生にある、ガリ版の発祥地の堀井家をスケッチした事があります。 昔の生活の有様がそのまま残されているのが共通点であり、自分たちに江戸時代の庶民 生活ぶりを物語ってくれたように感じ、また、スケッチのモチーフが増えて、嬉しかっ たです。未来の人たちに文化を伝える材料として残して欲しいと思います。

絵と文:小畠由佳理